

02・レイラ様と今日から同居

とある日の朝十時ごろ。

主人公とレイラの同居初日。

主人公は今、レイラに案内されて、レイラの家の中に入ったところだ。

しかし、その家は想像していたよりもずっと広く、立派で、主人公は驚いている。
なので主人公は、少し建物の中を探検している。

先ほどレイラに『少しその辺で待っていてくれ』と言われたからだ。
だが……そのうちに『その辺』と呼ぶには、少し離れた場所まで来てしまった。

〈主人公〉

「……」

するとそこへ、レイラがやつてくる。

S E 1 レイラが近づく足音

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてくる】

「穏やかに、優しく。

しかし、内心はかなり緊張している。

レイラは以前仲間に『後輩と接するのが下手だ』と言われた事を、非常に気にしている。なので、主人公との同居を機に、その汚名を返上したい。

つまり主人公とは、どうにかしてよい関係になりたいと思つており、そのせいで緊張しているのだ

……ああ、ここに居たのか。探したぞ

〈主人公〉

「……あつ……！　すみません！
つい歩き回っちゃつて……」

主人公、慌てて頭を下げる、ペコペコと何度も謝る。

主人公は先日まで、奴隸同然の扱いを受けてきた。

なので些細な事にも、必要以上に怯えて、謝ってしまうのである。

しかしレイラは、そんな主人公を早速誤解していた。

『自分の話し方や態度が恐ろしいから、主人公が怯えているのではないか』と勘違いし、内心不安になつてゐる。

「穩やかに、優しく。

主人公が歩き回つていた事については、全く気にしていない。

しかし、内心はかなり緊張している。

『もしかして、私の話し方や態度が怖いから、主人公はこんなにおびえて謝つているのではないか』と心配している

いや、構わん。

今日から君が住む家だからな。

早く馴染む為にも、じっくり見て回るといい

〈主人公〉

「…………！」

主人公、これを聞いて安堵し、あからさまにホツとした表情になる。
それを見て、レイラもホツとする。

「穏やかに、優しく。

しかし、内心はかなりホッとしている。

主人公とうまく話せそうなので。

そこで、さらに楽しく会話しようと、積極的に話を振っている

良い建物だろう？

君も気に入つたようで安心したよ」

（主人公）

「……はい！ とても素敵なお家です！」

こうしてこの場は少し和やかな雰囲気になり、レイラは本題に入る。

「にこやかに。

先ほどまでより、少し声が明るくなる。

主人公と楽しく会話で着てているので、安心している

さて、待たせたな。

部屋の片付けが済んだから、こっちへ来てくれるか

レイラ、主人公を、主人公の自室へ案内する。
主人公はこれについて行く。

S E 2 二人の足音

【最初から最後まで流す】

S E 3 レイラが主人公の部屋のドアを開ける音

【最初から最後まで流す】

「[今日から主人公が使う部屋をさして言っている]

ここだ。

今日からこの部屋が、君の自室となる。

【主人公達はまだ、正式に暮らす場所が決まっていない。】

なので『ひとまず主人公に関しては、レイラが預かる』という事になつていて

正式な住まいが決まるまでの暫定的（ざんていき）な処置ではあるが……。

その辺は容赦してくれると有難い。

【主人公がレイラの家に居候する事になつた経緯を話している。】

『あいつ』とは、レイラの友人の騎士の事。

彼女が『どうしても主人公たちを助けたい。面倒を見たい』と言つた事で、レイラの騎士団で主人公たちの世話をする事になつたので

しかし……あいつが亞人の娘達を引き取りたいと言つた時は驚いたものだが。

【『変わり者』とは主人公の事。

レイラはやはり『後輩育成に向いていない』と言われた事をとても気にしている。
なのでまさか、自分の世話になりたいという人間が現れるとは思つていなかつた】
まさかその中に、私の世話になりたいという変わり者がいるとはな】

（主人公）

「！」

主人公、その言葉を聞いて青ざめる。
そして、恐る恐る尋ねる。

（主人公）

「……もしかして、ご迷惑でしたでしょうか……」

「【少し慌てて。

ここから※マークまで、少しだけ早口になる。

『誤解を招く発言をした』と気づいたので】

あーいやいや。違うんだ。

迷惑だなんて思っていない。 ※

【少し照れて、もごもごと。

ここから※マークまで、だんだん声が小さくなる。

本当は、とても嬉しかったので】

ただ。これまでそんな奴はいなかつたものだから。

私も少々、驚いているというか……。 ※

【ここから、元の穏やかな口調に戻る。

恥ずかしくなって話題を変える】

とにかく。

君達の面倒は、今後我が騎士団が責任を持つて見る。

安心してくれ。

【特に優しく。

主人公に安心してほしいので】

改めまして、今日からよろしくな】

「主人公」

「……はい！ よろしくお願ひします！」

「主人公の今後について確認する。

主人公は今後、レイラの騎士団に入団希望である。

なので当面は、昼は学校に通い、放課後は訓練を受ける事になつた。レイラはその生活が、非常に大変であると理解している。
そのため、できる限り支えたいと思つていて

さて、君は明日から学校に通うんだつけな。

昼は学校、放課後は騎士団の訓練で大変だろうが……。
可能な限り支援するから、気軽に頼ってくれ。

【騎士団の現状について説明する】

特に、騎士団は慢性的な人手不足だからな。

君のような優秀な子に志願してもらえるのは本当に嬉しいよ」

「主人公」

「こちらこそ、どうぞご指導のほど、よろしくお願ひしますっ」

「少し打ち解けた様子で。

主人公がこれまでの印象通り、素直で真面目そうなので、安心している
では、夕食時（ゆうしょくどき）にまた会おう。
それまでは自由に過ごしていくくれ。
鍵はさつき渡しただろう？

この近辺であれば、外出してくれても構わないからな』

△主人公△

「あっ……。はい！ わかりました！」

主人公、素直に頷きつつも、露骨に心細そうな表情になる。

まさか、こんなに早く解散する事になるとは思つていなかつたのだ。
それを見て、レイラも申し訳なさそうにしている。

自宅に来てもらつて早々、主人公を一人にしてしまう事になつたからだ。
しかし、これは仕方のない事である。

レイラ、後ろ髪を引かれつつ、ひとまず主人公と別れる事にする。

「【※】ここから『※』マークのセリフ終わりまでずっと、
少し申し訳なさそうに」

まあ、本当なら、この辺りの案内をしたいところなんだが……。
すまんな。

【『チハ』と『エイミー』は主人公の仲間の名前。

今日は主人公の仲間たちも、新居に入る日である。
レイラはその手配の仕事を担当している】

まだ、チハとエイミーの部屋の手配が残っているんだ。
では、また後で」※

〈主人公〉

「はい！　また後で！」

主人公、深く頭を下げ、それから手を振つてレイラを見送る。

S E 4 レイラが去つていく足音

【最初から最後まで流し、フェードアウトする】
【だんだん遠ざかる】

ここでフェードアウトして終了。